



有限
會社

播



寺

二務店



兵庫県加西市大工町十六 ☎六七五―二四 電話番号〇七九〇四五〇五一五番® ファックス〇七九〇四五〇八七七番



事業の基は徳なり。徳なくして才は生かされぬ。

常に誠意を持った仕事でなければ技術は生きてこない。

又、それを理解し合える信頼関係こそ大切である。

民族的文化遺産でもある社寺建造物は、

多くの信仰者へ浄財を募って出来たものが多く、

先人の造られた立派な建造物には多くの人の願いが込められています。

改築・修理には最善を尽くし、百年、二百年後の子孫に継承して行くことこそ、

先人への礼儀でもあります。

社寺建築物保存と伝統的技法、技術者の育成に努め、

価値ある社寺建築物を造り又、保存して行くことが

与えられた使命と努力して参ります。

宮大工名匠の里（大工町）

大工町は名の通り、大工職人の里として非常に有名な所です。

その昔、京都に都が在った頃、宮中に入入りを許されていた大工の棟梁（飛驒の名匠だったと聞いています）が、雲潤の里と呼ばれていたこの地に身を寄せて来ました。その名工はこの土地で、自分の技術の子孫に伝えたのです。その技は次第に全村に及び、多数の大工が生まれることになりました。この村に在るお宮の敷地には、以前一反歩（十アール）にも及ぶ広さの前方後円墳が在って、これは飛驒の名匠の墓であると言ひ伝えられています。

大工村の職人たちは、特に社寺建築の技術に長じておりましたので、各地のお寺や神社は、この村の大工が建てております。中でも、この村から丹波を経て京都に通じる沿道の神社・寺院は、この村の職人によるものが多いです。京

都で御所の御造営が行われた時も、この村から六十五人もの大工が、京の都に出てその建築に携わりました。加西市でも酒見寺や奥山寺の多宝塔等は、大工村の職人によるもので、その技術の高さを伺い知ることが出来ます。そして大工町には三百年以上を経た今も、この技術が生きているのです。

ちなみに大工町の「神田」という名字は、当時宮中より授かったものだと言われております。(小説「白鷺の城」、著者／黒部亨にも脇棟梁、神田音吉として載っています。)仕事の功績によって姓を頂き、藤原、高橋宗左衛門、神田作左衛門と姓が代わり、そして現代、神田利八郎、神田利一(昭和六二年 黄授褒章受賞)を経て、三十代目神田定秀(文化財建造物技能認定者)と至っています。

(神田勲氏、神田利一氏の話より)

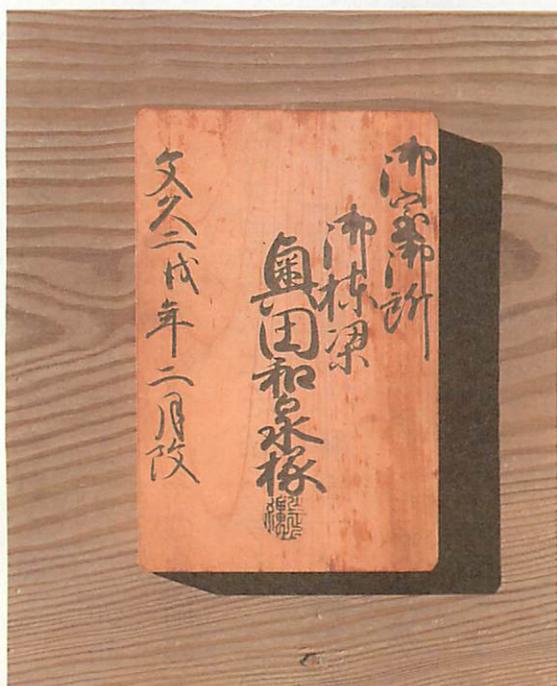
御札 (昔の指名業者の許可札)

御室御所

御棟梁

奥田和泉椽

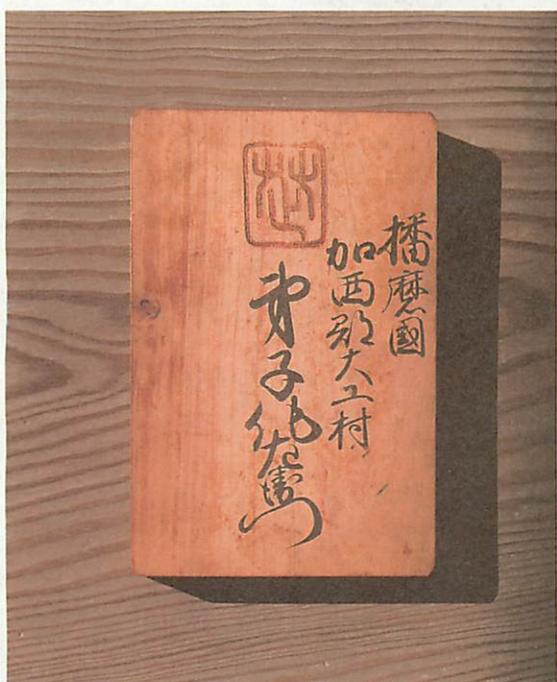
文久二戌年二月改



播磨国

加西郡大工村

弟子作左衛門



墨壺



上棟式の儀式には、大工道具の代表的なものを供え、棟梁が家運隆盛と安全を祈願して祝詞を読み上げます。その道具の一つに墨壺があります。

儀式用に使われる為、実務用のものより大きく鮮やかに出来ております。

御墓

功績の大きかったと思われる祖先に立派な墓が残っています。



元禄十三年庚辰（一七〇〇年）
貞享元年甲子（一六八四年）

勲章



加西市酒見寺多宝塔を始めとして、三木市伽耶院、養父郡八鹿町名草神社の三重塔等、文化財修理に宮大工の伝統技術を發揮した功績と、後進の者に継承出来るよう指導努力したとして受賞しました。

工作について

社寺加工機

従来木工機械は、平面の単一加工しか出来ませんでした。NC社寺加工機では、社寺特有の曲線加工が出来る他、記憶させることにより、何回も同じ加工が出来ます。作業は材料を加工盤の上に固定し、操作盤のボタンで行うだけです。

解体修理

解体修理では、解体後、補修完了した部材を組み直します。隅部材の加重が大きい為、桁等も隅が下がって、その下の部材も大きく曲がっています。隅の高さを一定にしようとすると、長年の加重で変形した部材と元の位置とは隙間が生じます。そこで建物本来の持つ美しい形に近づける為、どの位置にパッキンすれば良いか検討し確認します。(写真一)

斗供の組み合わせは、部材に生じたねじれ、曲りの為に本来の位置がずれ、働きが出来ません。そこで一つ一つ丁寧にパッキンを行い、元の位置で古材が納まるようにします。(写真二)

解体部材には、どんな小さい部材にも全て番付を付けて、組み直した時点で解体前と同じ場所に部材が納められるように行います。(写真三)

建築職人

大工の技術と職人の精神

職人の心

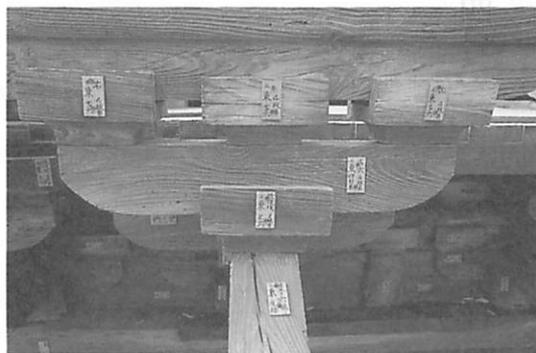
大工の技術と職人の精神



一



二



三

酒見壽多寶貝塔

重要文化財

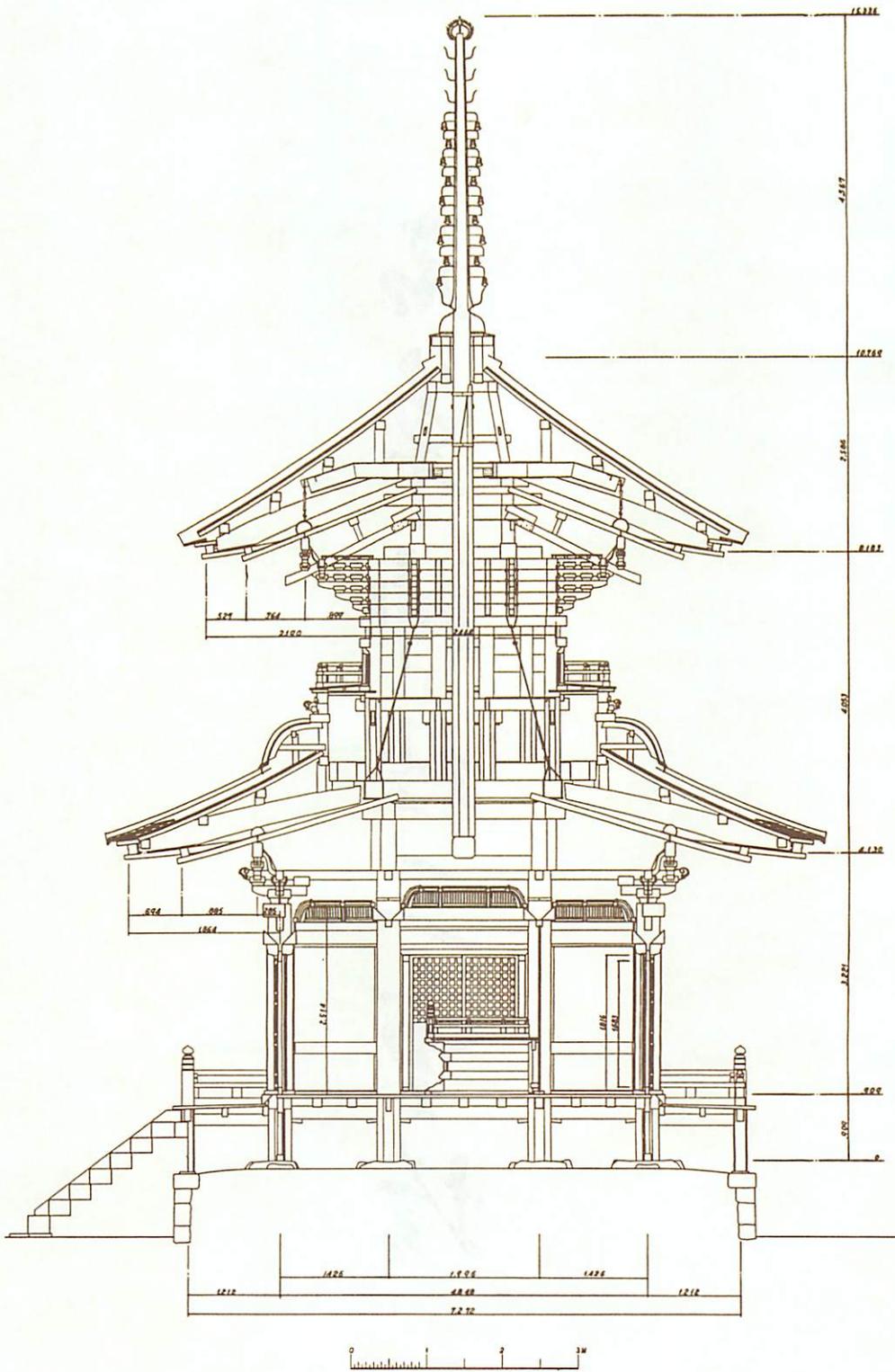
寛文二年（一六六二年）建立

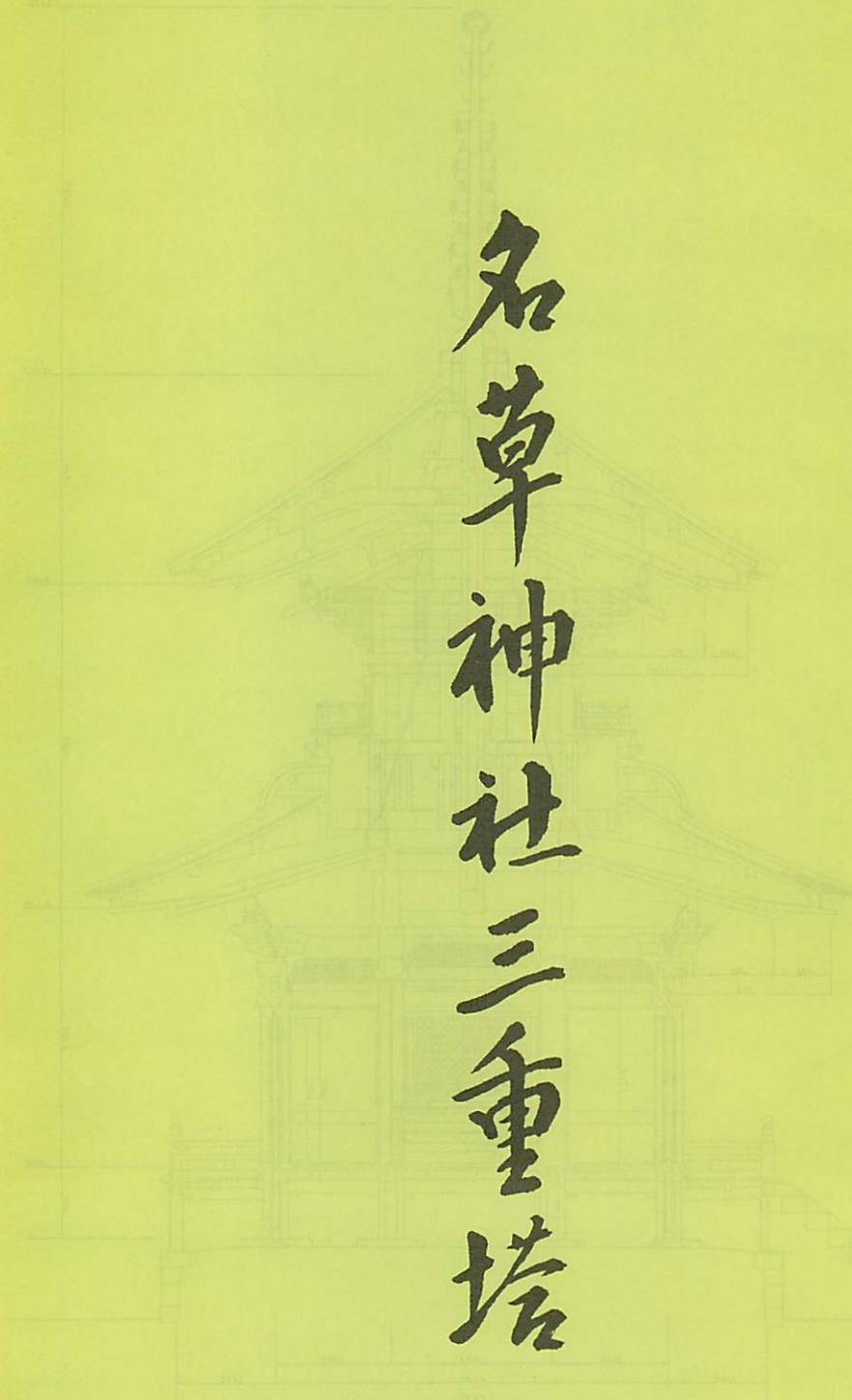
「奉造立宝本願実相院大工字仁住、宗左エ門家次、作之」とあり、先祖の作であります。三百年後に大修理する機会を得られ、創建当時に負けない立派な修理をと思いました。縁により先祖が携わったこの塔は、堂宮建築技法の集約建造物であると亡き父が話してくれたことを思い出します。先祖（宗左衛門家次作之）の生きた教材伝統文化を継承する機会を与えて頂きました。

解体は調査実測を徹底して何回も繰り返し、現状と当初の型を前もって把握して始めました。極彩色部分の工事の際は、変色した彩色（胡粉・丹・緑青・朱・群青）及び紋様の色付けをした見本を何枚も何枚も作り、顔料の変色調査をしました。決定するまでは大変でありました。



兵庫県加西市 酒見寺多宝塔





名草神社三重塔

重要文化財

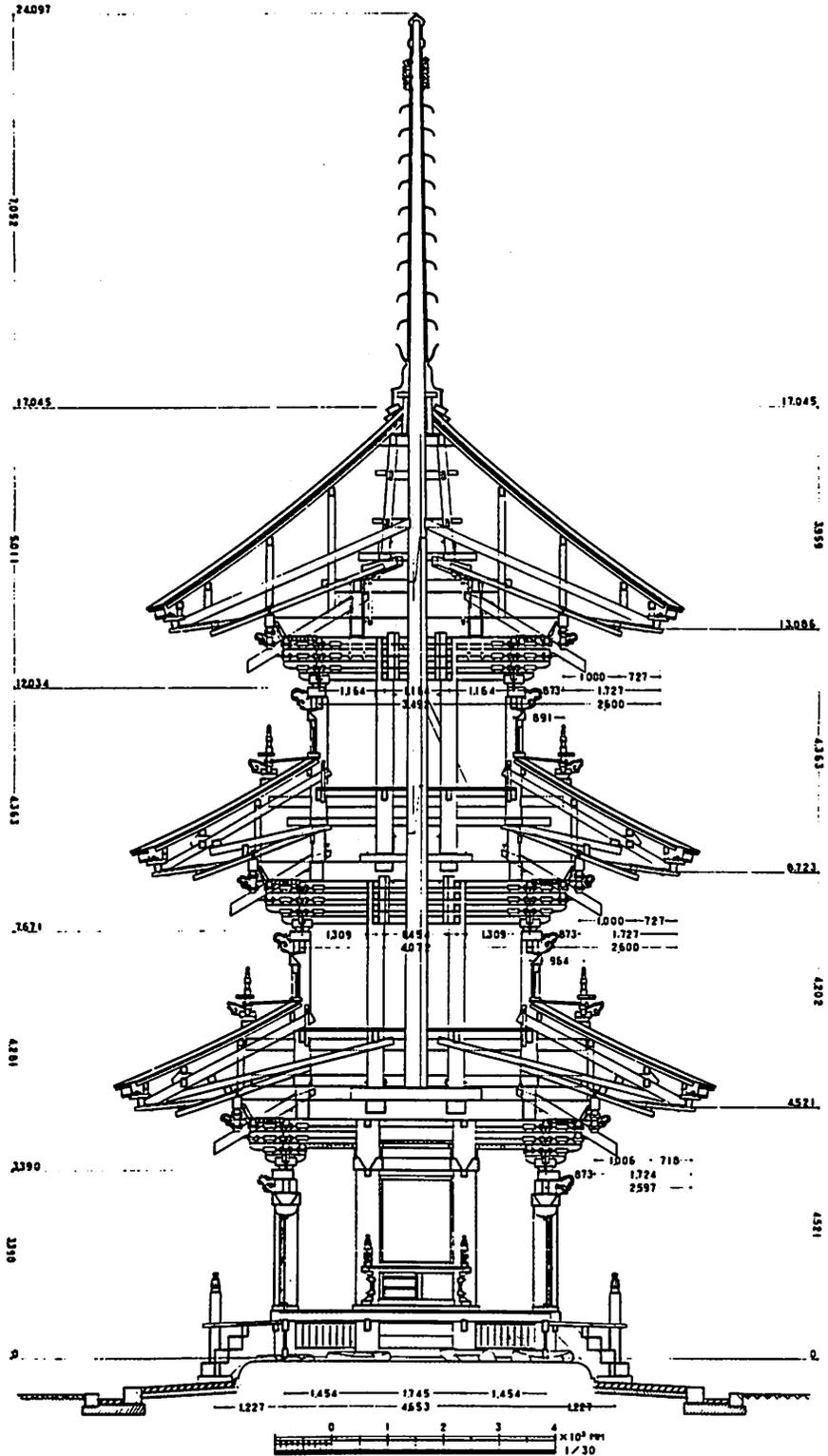
大永五年（一五二五年）出雲大社の境内に建立

大社造替時の寛文五年（一六六六年）に現在地（兵庫県養父郡八鹿町）に移築

出雲大社から寛文五年に妙見山に移築された大正の三年間に、大修理がなされていきました。しかし昭和五九年の大雪の為、南面上層の雪が二層に落ち、初重もその重みで破損が生じてしまっていたので、今回は移築後初めての解体修理を行いました。雪等の重み等で曲がり、割れ等の為使用出来ないものや、松古材で殆どが害虫に侵されていたものは取替えました。また再用材は害虫駆除（天幕ガス燻蒸）を施しました。桔木は杉を使用していたものを檜に取替え、大雪等の加重に耐えられるように工夫しました。その結果、平成三年の台風十九号で大木の杉が塔に倒れましたが、塔は直接当たったにもかかわらず部分的な損傷に留まり、屋根の構造部分への被害はありませんでした。



八鹿町の西端標高七百メートルの妙見山南麓に位置
兵庫県養父郡 名草神社三重塔

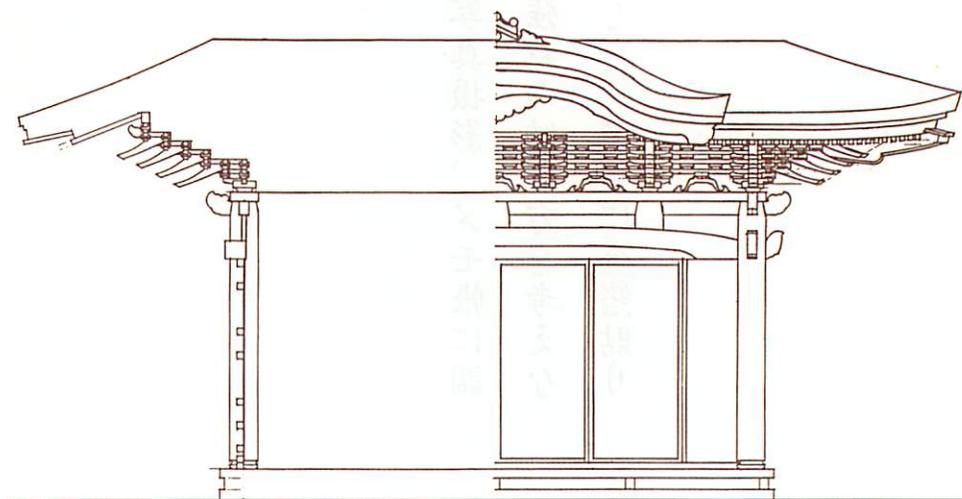
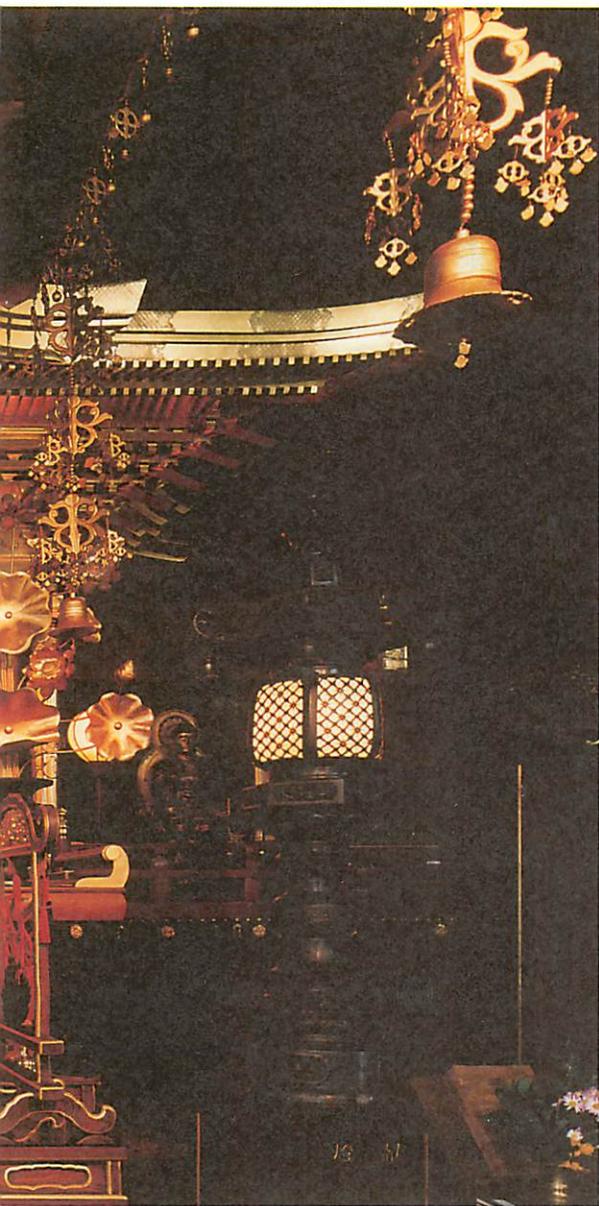


清水壽宮殿

須彌壇

漆塗材料生漆日本産上質漆 金箔・三号 純度九十六%

宮殿を修理するにあたっては、番付け札打ち、実測、写真撮影、メモ帳に調査控えをとる等して解体しました。そして組み立ての補強材の納め方を考えながら、歪みをどのように直して行くか慎重に検討致しました。漆塗に金箔貼りの仕上がり部分は、特に緊張する所でありました。





兵庫県加東郡 清水寺須弥壇

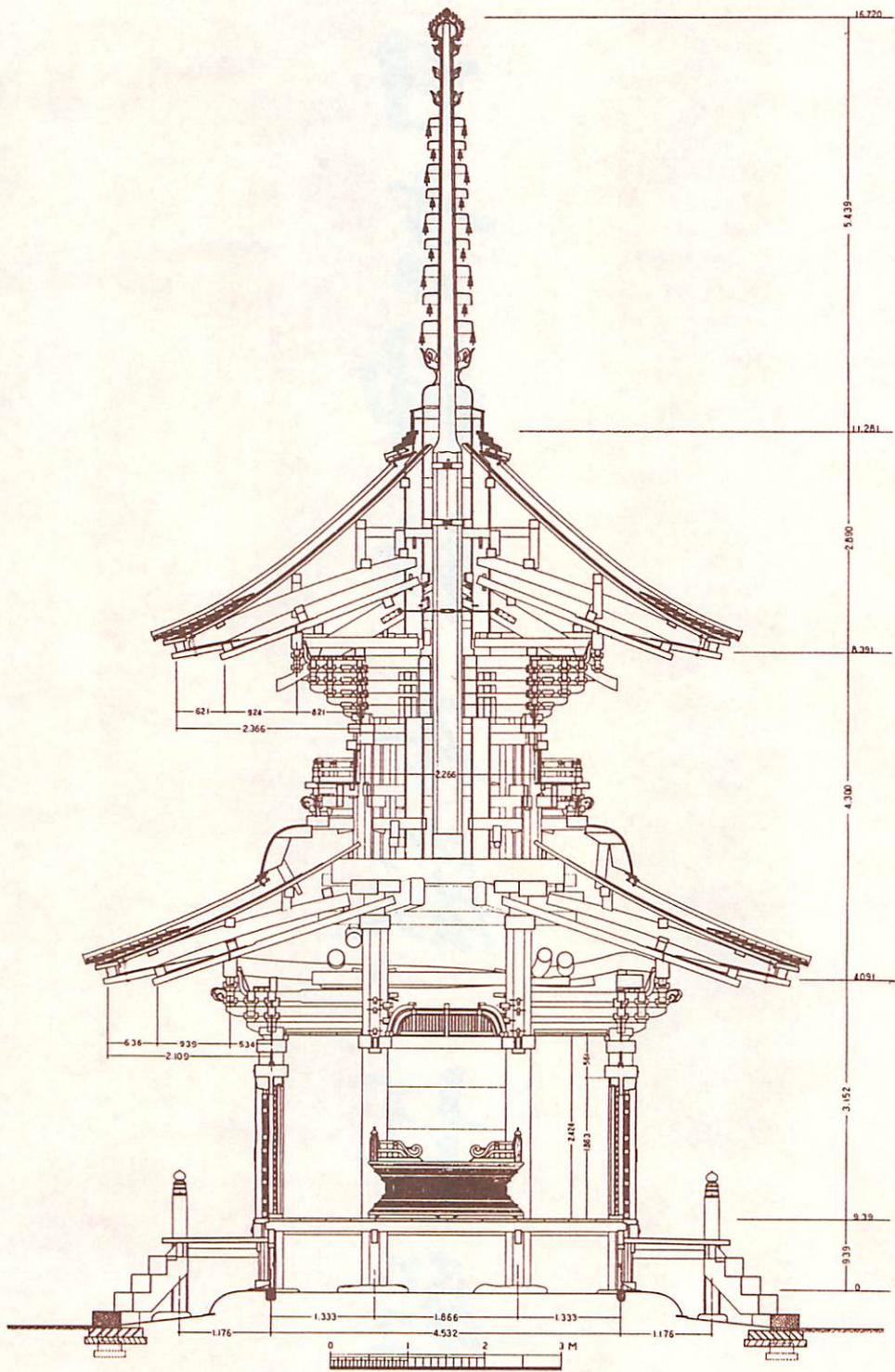
伽耶院多寶塔

寛永末年から正保初年の建立

多宝塔は天明年間頃に相輪を廃して、瓦製の露盤宝珠に替えており、昭和四一年の台風では東北隅に倒木被害を受け、軒廻り等を修理しておりました。この度は縁廻り・軒廻りを初層・上層共に解体し、相輪を復元する為の修理を行いました。

兵庫県三木市 伽耶院多宝塔





日吉神社本殿

拝殿

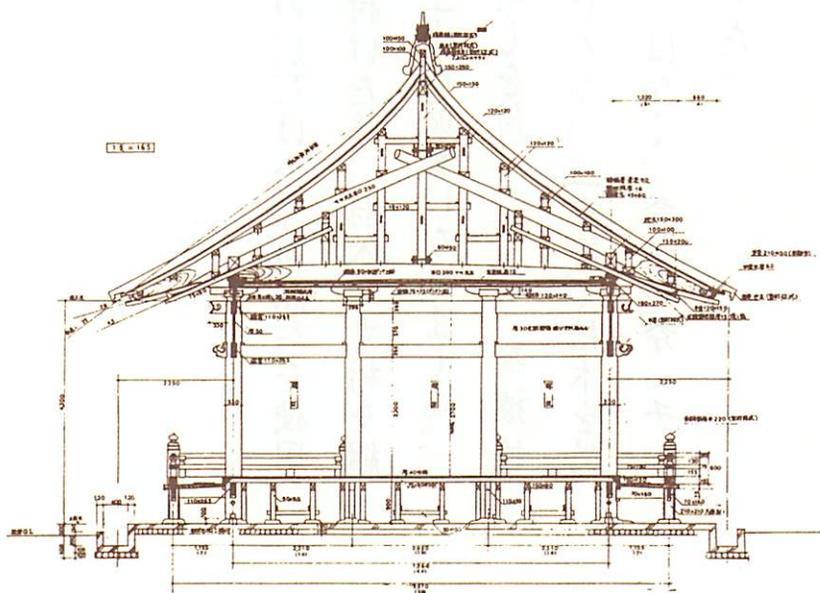
三間社流れ造り（摂社白山姫神社本殿の形式）

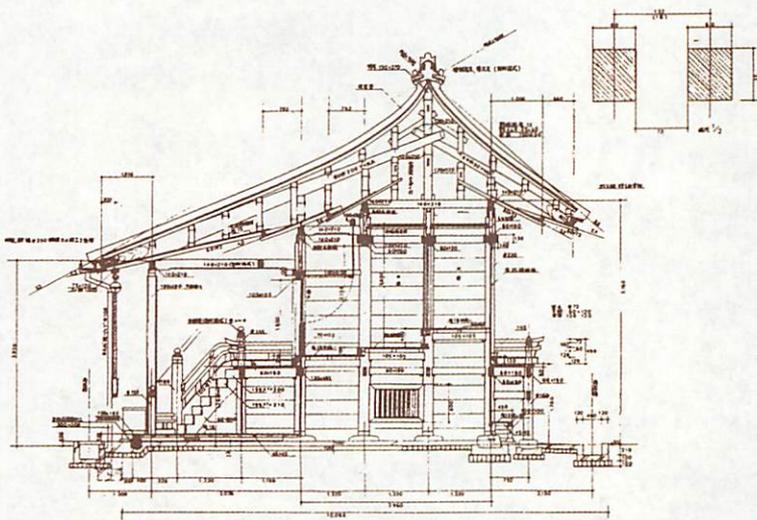
再建工事では境内の既存石を一部再利用し、建物の礎石は全て自然石を使用しました。拝殿隅柱は二センチメートルの隅延びを付けた為、肘木・丸桁を組合わせた際、反り上がりの歪みが生じるので施工に工夫が必要になりました。

軒反りは真反りとし地樫は反りを付け、樫鼻には増しを付けました。飛猿樫は反りを付け、先をそぎこぎ小屋組は耐久性を持たせる為、三重梁で桔木を必要以上に増しました。梁等の丸太材は葉の処理のみではなく、斧・手斧（チヨウナ）でうりむきに仕上げ防虫・防蟻にも考慮しました。



兵庫県姫路市 日吉神社 拜殿





本殿

圓教壽塔頭十妙院

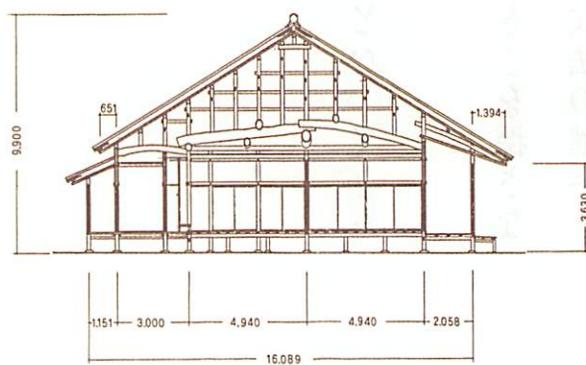
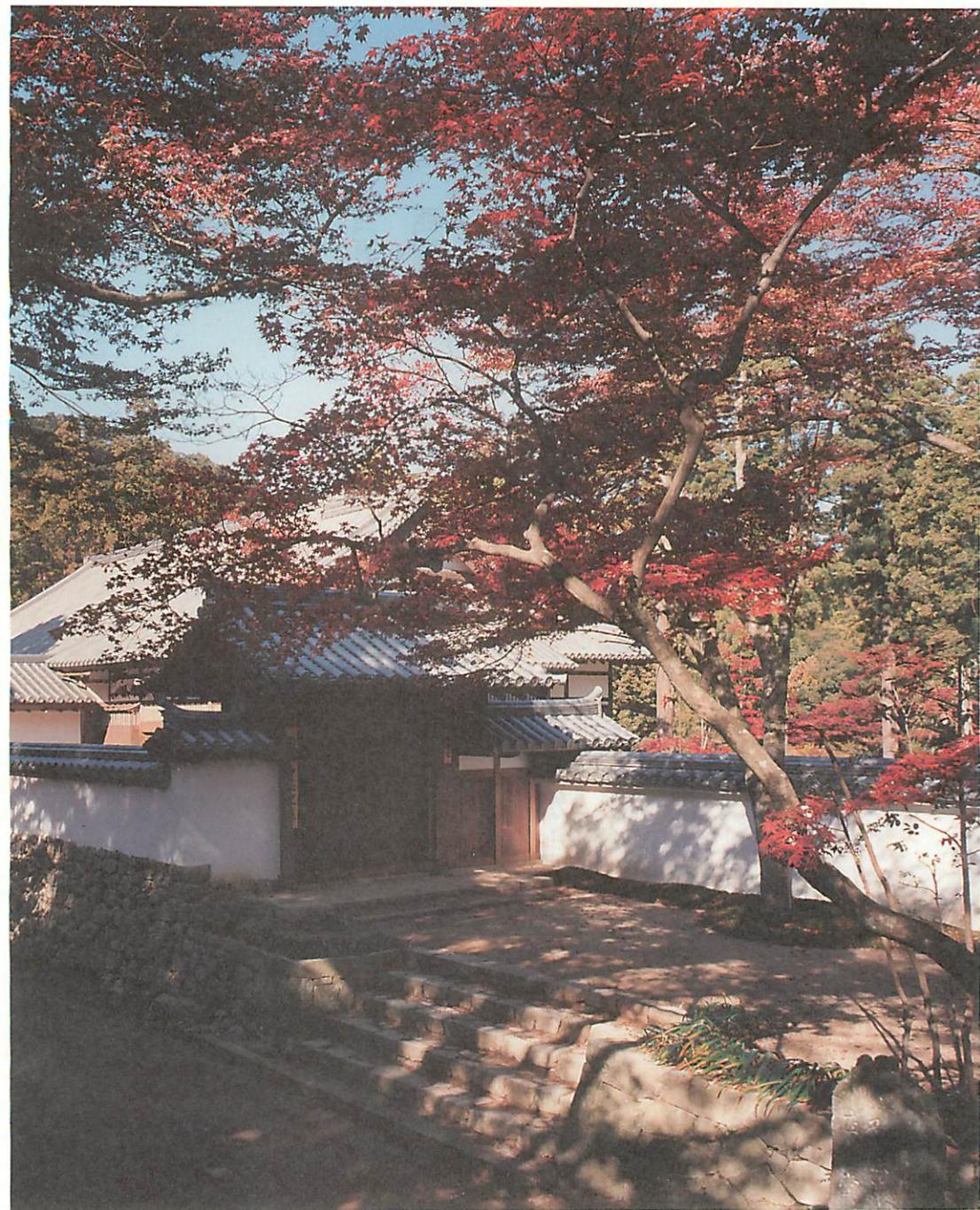
重要文化財

貞享元年甲子（一六八四年）建立

西国靈場三十三所の第二十七番礼所として名高い書写山

近年屋根の傷みが甚だしく雨漏りが生じ、棟が陥没寸前の状況となってきたので、今回一部解体修理を実施することになりました。

不陸調査後調整して、小屋梁の修理は取替材で、現状の型・大きさを探さなくてはなりません。部分的に取替える作業なので、当初の技法の継手・仕口・組手かを判断して施工しました。屋根の谷は箱型の樋を入れ、水の流れを無理なく処理出来る工夫をしました。



兵庫県姫路市 圓教寺塔頭十妙院

